慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済原理四分法の弁（下）
Sub Title	
Author	三邊, 金蔵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1918
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.12, No.2 (1918. 2) ,p.243(87)- 260(104)
JaLC DOI	10.14991/001.19180200-0087
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19180200-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の上に於て一氣に樹立せんとせらるゝ所以は、即ち予が『彼等の問題とする所は常に社會の上位に立ち特惠の地位に在り富と權力とを其手に握る所の高等種族の人生觀にして下層多數者の世界人生に對する思想の如きは全く問題たらざるに非ずや……今日までの哲學者は極めて僅少の取除の外は自ら或は悟らずと雖も特惠階級、富權階級の天地を以つて哲學の天地と看做しつゝあり。社會政策が如何に力を盡して其中より自家の根柢を得んと勉むるも終に失望に終ることは當然なり。』『金非教授記念最近社會政策』第四百四十六―七頁と云ひたる所以たらずんばあらず。

（附言）ハルテンシュタイン版本掲出の『哲學の一切に就て』なる文は、カント自筆文の全部にあらず、ベックの改竄したる所に係る。故にアカデミー版に於ては近來ロストックに於て發見せられたるカント自筆の全文をカント『自筆遺文集』に收錄す可き筈なる由ヂルタイ氏の總序に見へたりと雖も、其部分は未だ上梓せられず、故に本文に於ては、不得止ベックの改竄文を引きたり。諒焉。

經濟原理四分法の辨（下）

三邊金藏

四

四分法論者の見地が目的觀的見地に外ならざるは、以上述ぶるところに依りて略ぼ明瞭なるべしとして、次に然らば、此見地よりすれば、四分法は、何故其自らを正當視せしむるに足る一系の論理的根據を有すと主張し得るや。此問に對する解答は、生產、交換、分配、消費の各論下に於て、主として論せらるゝ所は如何なる事項にして、而して其が此處に論せらるゝは、又た如何なる理由に基くものなりやを明かにすれば、自から求め得らる可きが故に、以下順を追ふて、試みに此點に關する私見を開陳せんに、先づ第一に生產論の下に於て論せらるゝは、所謂生產の三要素たる土地、資本、勞力の供給增加と、是等三要素の結合より成る所謂經營の大小比較論とにして、而して前者の中土地に關しては其面積上の增加は殆んど問題たらず、問題

たるは主として其性質上の增減如何にして、土地の豐度を以て研究の主題とすべしとなし、所謂收穫遞減の法則なるものをとりて是が主要なる解答となすと共に、一面收穫遞增の法則を說きて其章の終りとなし、次に資本に關しては、資本は如何にして成立し、又た如何にして增加するやを主要なる問題として研究し、貯蓄こそ是が主たる原因なれとなして其諸問題を攻究するを常とす。而して彼の勞働に關しては其數量上の增減と品質上の增減とを問題となし、數量上の問題に就ては、先づマルサスの人口論を則として、一國總人口の增減は如何なる事情に依りて左右せらるゝやを論究し、次ぎに人口の年齡別及體性別を論じて、茲に一國勞働力の分量を決定する主要因研究の業を卒り、品質上の問題に就てはアダム・スミスの力說せる分業論を主要の問題として之が研究に從事す。大經營小經營の比較論に於ては、一般に大經營の小經營よりも一層經濟的なるを說きて其長所と短所とを擧げ、然る後に、農業の場合に在りては、此事必しも主張し得可からざるを說きて以て其論を終る。然れば、生產論が生產其ものに就ての議論にあらずして、生產要素增減論に外ならざるは、嘗つて福田敬授の正しく喝破せられたるが如くなりと謂ふ可く、從つて「生產論の名に重きを置て、之を學ばんと欲するものは、必ず失望せざる能はざるなり。而して如斯は獨り正統學派の學者のみならず、獨逸の新學派たる歷史學派亦皆然らざるはなし。經濟學四分法を排斥する新派の學者も、事實に於ては、また全く此の舊套を襲ふのみ。予輩不平なき能はず。」（經濟學講義四七五頁）と言はれたる其不平は、決して無理なる不平を以て目す可きものにあらずと謂ふ可きなり。

然れども、轉じて之を四分法論者の側より見るとして、彼等は是に對して答ふ可き何等の言辭をも有せざるべきや。吾人は彼等の名譽の爲めに其必しも然らざるを言はんと欲す。蓋し吾人の見る所を以てすれば、彼等は一定の起業心（敢て企業心と言はず）の存在を許せば（アダム・スミスは個人の自利心の發動に是を求めたとり解し得可く、社會主義を唱ふる者は一般に公衆の需要の裡に是を求めんとすと解し得可き乎）、生產要素の增殖は驟て生產の增進となり、從つて國富の增加を來す可しとなせる者なる可くして、彼の點を論じ了れば、彼等自らの設定せる問題の此方面よりの解決は、茲に一段落を見たるの道理なりと謂ひ得可ければなり。四

分法論者が今日の所謂企業を當面の問題とせるも、同じ考へ方よりすれば寧ろ事の當を得たるものにして、必しも彼等の過失を以て目す可きものにあらざらん也。何となれば今日の企業なるものは、國民經濟發展の一階段上に咲き出たる、謂はゞ一本の花の如きものにして、今日の見る目には如何に麗しく盛んなりと雖も、移り易くて暫くも止むことなき人間の歷史は、やがて落寞たる秋風を吹き寄せて、凋落の悲哀を彼等の上に齎らさゞるを得られんなり。

まじきなるに、經營の規模如何は、斯くの如き謂はゞ結ぶと見る間に消ゆる朝露の徒事ならずして、苟も最少の勞費を以て最大の效果を收めんとする人間性情の易らざる限りは、常に考へ行かる可き性質のものにして、其利益の攻究は眞に一時の問題たらざればなり。ジョン・スチユアート・ミル（彼は消費論を否定することに依りて四分法論者たる域より脫せりと雖も、爾餘の議論に於ては事實上四分法論者と大差なきが故に、今即ち彼の名を借る）が生產論と分配論とを比較對照するに際して、左の如き言をなせるは實に偶ま此間の消息を語るものとして此處に引用し

Whatever mankind produce, must be produced in the modes, and under the conditions, imposed by the constitution of external things, and by the inherent properties of their own bodily and mental structure.

Whether they like it or not, their productions will be limited by the amount of their previous accumulation, and, that being given, it will be proportional to their energy, their skill, the perfection of their machinery, and their judicious use of the advantages of combined labour. Whether they like it or not, a double quantity of labour will not raise, on the same land, a double quantity of food, unless some improvement takes place in the processes of cultivation. ×××× The opinions, or the wishes, which may exist on these different matters, do not control the things themselves. We cannot, indeed, foresee to what extent the modes of production may be altered, or the productiveness of labour increased, by future extensions of our knowledge of the laws of nature, suggesting new processes of industry of which we have at present no conception. But howsoever we may succeed in making for ourselves more space within the limits set by the constitution of things, we know that there must be limits. We cannot alter the ultimate properties either of matter or mind, but can only

employ those properties more or less successfully, to bring about the events in which we are interested.(J. S. Mill; Principles of Political Economy.)（文餘りに長きが上に本文の傍證たるに止まれば今玆らに之を譯出せず）

五

四分法論者が、其生產論に於て、生產要素增減論を試みて以て自ら足れりとせる理由は、正きに上述の如くなりとして、次に彼等の交換論は何を主題となせるや。吾人の見る所の如んば、純然たる四分法論者の交換論は、主として貨幣、銀行、及商業及運輸交通に關する理論の研究より成るものにして、價値及價格に關する研究は、謂ばゞ之に附隨して論せらるゝに過ぎざるものゝ如し。然れば貶して之を云へば、彼等の交換論も亦た交換其ものに關する議論にあらずして、其實は交換用具論たるに止まるものなりと稱し得可き次第なるが、彼等が是を以て自ら滿足せるは、果して如何なる理由に基くものなりや。吾人は其理由を覓めて之をアダム・スミスの左の一句に得たりと言はんと欲す。

The division of labour is limited by the extent of the market.（分業は市場の大さに依りて制限せらる）

蓋し四分法論者の貨幣を論じ、銀行を論じ、其制度規定の確立を以て國民經濟上の一大重要事なりと說くは、是に依りて安全確實なる通貨を供給し、因つて以て物々交換より生ずる不利不便を除き、交易進捗の便を備んが爲めにして、其商業及商業組織を論究するは、其存否及組織の良否が、生產者と消費者との間に於ける事情の疎通を致す上に甚大なる影響を及ぼし、此方面より、交易の機會を決定するものあるが爲めなりと謂ふを得可く、而して其運輸交通を論じ、其機關の整備如何を問題とするは、即ち又た其完全と否とが、距離の隔絕より生ずる交易上の障碍克服の程度を表はし、此方面より再び交易の難易を定むるものあるに因るものなりと謂ひ得可きが故に、總じて之を言へば、凡そ彼等の是等事項を論ずる其目的は、交易の範圍と機會とを增大せんが爲めにして、而して其特に是を目的とするは、交易の範圍機會の增減、換言すれば市場の廣狹如何が、分業發達の程度を定め、斯くて間接に、勞働の品質上の增加の上に影響するものあるを認めたる、其結果に外ならずと謂ひ得可ければなり。然れば四分法論者の交換論は、之を生產論の續論と見做すも

必しも不可ならずして、分ちて之を論ずるは主として行論の便宜によると解す可きなり。彼のジェー・ビー・セイが其著 Traite D'économie politique に於て生產、分配、消費の三分法をとりたるは、形に於て四分法論者の其と相異れりと雖も、其生產論中に、四分法論者の所謂交換論を包含せしめ居るが故に、其實質に於ては四分法をとれるところと異るところなくして、而かも偶ま吾人叙上の解釋を裏書するものなりと稱し得可きなり。

六

却說分配論が、利潤、地代、勞銀に關する研究たるは周知の事實なるが、四分法論者は、利潤が如何にして發生し、地代が如何にして地主の掌裡に歸し、勞銀が如何にして勞働者の手に與へらるゝやを論究せんと欲するものなりや否や。因果的見地に立脚する所謂所得分配の過程を論述せんと欲するものなりや否や。換言すれば、る人士より之を觀れば、是は當さに叙述せらるべき筈の眼目たらんも、目的觀的見地に立つ四分法論者の側より見れば、是は必しも然らずして、其問題は自から他に在りて存するなり。他とは何ぞや。ヱドキン・キアナンの左の言は吾人に代つて此問に答ふるものなり。

Looking at the ordinary non-economic use of the term, we can imagine an essay on the distribution of produce relating to either of two different questions, first, 'in what manner or by what means is the produce parcelled out among those who receive it?' or secondly 'in what proportions is the produce divided among those who share it, and what determines these proportions.'

* * * * *

Whatever may have been the cause of Adam Smith's choosing for his First Book a title which did not really describe its contents, the effect has been to identify 'distribution' in English economic treatises with a discussion of the causes which affect wages, profit, and rent ——E. Cannan; Theories of Production and Distribution. (此語の日常非經濟的なる使用法を考察すれば、吾人は生產物の分配論は、第一、生產物は如何にして、若くは如何なる手段に依りて其を受領する人士の間に分たるゝや、若くは第二、生產物は如何なる割合にて之に與かる人士間に割り當てらるゝや、及此割合を決定するものは何ぞや、てふ二個の異れる問題の孰れかに關するものなるを想像し得。×××× 眞實に其内容を告げざる表

題を彼の（國富論）第一卷に對しアダム・スミスの撰みたる動機は、如何なるものなりとするも、其結果は英吉利の經濟書に於ける「分配」を勞銀、利潤、及地代を左右する原因に關する議論と同一視せしむることゝなれり）。

即ちキアナンは、普通の經濟書に於て分配論と謂ふは、一般に所得形成の過程を論ずるものにあらずして、實は勞銀、利潤、及地代の三者に就き、其多寡の割合及び其割合を決定する原因を攻究するに止まるものなるを言ふものにして、而して福田敬授は嘗つて「此語に特別の意義あるは、キアナン既に之を說けり」として此に贊同の意を表せられたれば、四分法論者の分配論が、汎く所得形成の過程を論ずるものにあらざるの事實は、既に世に定論ありと謂ひ得可けんなり。

夫れ然り、然らば四分法論者は何故に汎く所得の形成に就て論ずることをなさずして、狹く勞銀、利潤及地代の研究に其所論を局限せるや。

四分法論者を以て因果的見地に立ち國民經濟場裡に展開し來る經濟現象を論理的に闡明せんと試みたる者と解せんか、彼等の此處に爲せる所は、眞に永久の謎にして終に解くる時なかるべし。反之、吾人の解するが如く、彼等を以て目的觀見地に立ち國富增加の問題に其畢世の精力を傾注せる者となさんか、此問題は自ら解け去りて些の困難をも殘さゞるべし。蓋し四分法論者の分配論は、其生產論と相對さしめて之を見るべきにして、而して彼等が其分配論を擧げて勞銀、利潤及地代の研究に委ねたるは、所謂生產の三要素たる勞働、資本及土地に對する報酬の多寡如何が、是等要素の品質上並びに數量上の增加に影響を及ぼし、斯くて又た國富增加の上に至大の影響を與ふるに至る可きを認めたる其結果に外ならずと解すれば、玆に其最も合理的なる解釋を得可ければなり。

然り而して吾人の此解釋は、分配論成立の歷史に訴ふるも亦た其支持を受くるものゝ如し。蓋しキアナンの考證するところに依れば、斯學に所謂分配なる語の起源は、ケネーの經濟表の說明に在りと云ふ。然るにケネーの經濟表の說明は、彼が其起首に於て、一國の有效なる生產は富が生產的階級（ケネーの所謂）に歸着する其多寡に賴るものなり。若し富の大部分が不生的階級に歸屬し、生產的階級に復歸することなくば、其結果は國民所得の減少たるを免れずと說ける、其趣旨を骨子として反覆之を論じたるものに外ならずと、解して太過なければなり。

故に吾人は最後に論結して斯く言はんと欲す。曰く、四分法論者の分配論は四分法論者自らの見地より之を判ず可きにして、而して此見地より之を觀れば、彼等の分配論は決して失敗を以て目すべき性質のものにあらざるなりと。

七

却說最後に、消費論の問題とするところは果して何なりや。今日消費論の標題の下に論述せらるゝところは題材頗る貧弱僅少にして、殆んど一分科をなすに足るものなしとは、世人の往々唱ふるところにして、事實も亦た其然るを證明するところあるに似たり。然れども其斯くの如き性質のものたるに至りたる抑もの原因は、昔者嘗て此題下の主要問題として重要なる部分を占めたる公團體の消費に關する論議が、其後一般財政論中に移し收められて、題材の一部茲に漸く其乏しきを加ふるに至りたる其一方に於て、殘餘の部分たる私人の消費に關する論議が又た、昔日の目的觀的見地より攻究せらるゝことなく、却つて因果的見地より一般需要論の先驅又は前提として討究せらるゝに至りたる其間の事情に存することなれば、彼の事實を提げ來りて四分法論者の消費論を攻擊するは、決して事の當を得たるものと稱し得可からざるなり。然れば吾人は此處に於ても事の始めに溯りて、四分法論者の趣旨を探り來らざる可からずとして、先づ彼等昔日の所論を案ずるに、彼等は消費を分ちて私人の消費と公團體の消費との二となし、更らに其各に就て生產的消費と不生產的消費との別を立て、却說然る後に其所謂生產的消費に就ては、既に生產論に於て其論を盡したれば、今再び之を論ずるの要を見ずとして、之を省略に附すると共に直ちに筆を進めて消費本論に入り、私人の消費と公團體の消費（何れも所謂不生產的なる）とに就て、如何なる種類の消費が正當視し得可き性質のものたりや、之を判定すべき準律を論じ、合せて奢侈の怖る可く愼む可きを述べ斯くて漸く其論を終るを常とす。然れば彼等の消費論は佛のシアール・ジードが The theory of consumption has to deal with the various uses that can be made of wealth, and has to show us in particular what are the economic as well as the moral reasons which should lead us to choose the respective modes of employment.（消費論は富の使用せられ得る其各種の使用法を論じ、且つ特に吾人を導きて其當を得たる（respective にては意通せず respectable の意なるべしとして斯く譯出す）使用法を撰ばしむ可き經濟上並に道德上の理由

は何なりやを吾人に示すものなり。――ジード、經濟原論第三版）と云へる其言の如く之を解すべきにして、而して之を然か解するときは、吾人は何人と雖も四分法論者の消費論の意を認むるに吝なる能はざるべしと信ずる者なり。蓋し四分法論者が如是の議論をなすは、私人及公團體の消費如何が直ちに國富增減の上に影響するところあるを認めたる其結果に外ならずして、而して此點に於ける彼等の見解が決して不當にあらざるは、四分法に就て既述の如き見解を下されたる福田敬授、及嘗つては消費論は經濟學研究の埒外に在りと斷ぜられたる河上敬授が夫れ〳〵に左の如き言をなし居らるゝに徵して、明かに、而して興味深く、之を知るを得ればなり。

昔に在つては一個二人が如何に浪費濫費しても、如何に經濟が拙であつても、それは其人一人の損に止り、其人一人の災に止つて居つて、直ちに國家の運用の上に又た國民經濟全體の上に影響を來す譯では無かつた。今日はさうで無い。我々の僅か一ヶ年數百圓に出でない、或は數千圓に出でない處の小さい家計でも、其運用を誤るといふことは、極めて小ではあるけれども、國全體の經濟の上に影響を及ぼす。是が澤山重なれば重なる程、全體に及ぼす影響が大きくなつて來るのであります。……何故かといふと國の富と云ふものは國に在るのではない。我々が皆分有して居る。我々が銘々が持つて居る富の外に富は無い。……其富の極く微小の部分でも拙く使はれ拙く運用せられて是が減少すると云ふことは、即ち日本の富がそれ丈け減ると云ふものであります。反對に我々の爲す所が自分の富を殖せば、即ち日本の富が僅かではあるが殖へることになるのであります。（國民經濟講話、乾、八一―九頁）

今日餘裕のある人々が、奢侈贅澤の爲に投じて居る金額は大したものである。さうして假に其等の人々が若し一切の奢侈贅澤を廢止したとするならば、是迄さういふ事に浪費されて居た金は皆浮いて出で其が盡く資本に爲るのである。それから又、さういふ奢侈贅澤品を製造する事業の爲めに吸收されて居た資本も、皆浮いて來るのである。さうなつて來れば、いくら資本の缺乏を訴へて居る日本でも、優に諸般の事業を經營するに足るだけの資本が出て來る筈である。……今日では資金の缺乏の爲に農事の改良も十分に行はれぬといふけれど

も、既に資本が豐富になれば、其農事の改良なども着々行はれることに爲るであらう。さうすれば米も澤山出來るで有らう。米が澤山出來れば自から米價も下落するが、併し其と同時に他の生活必要品も凡て下落するのであるから、米を買ふて居る人々が仕合すと同時に、米を賣る農家の方も更に差支ない譯である。（貧乏物語、二四六―二四七頁）

八

以上は吾人の所謂經濟原理四分法の辨にして、其未だ完からざるものあるや勿論なりと雖も、然かも以上の如く解するときは四分法論者の企てたる所が悉く失敗を以て了りたりと解す可きものにあらざるの理は、則ち又幸にして之を明にするを得たりと信ず。若し果して然らんには、吾人最初の企圖は玆に一先づ其業を卒りたるものにして、是れ以上若くは以外に言及せんは、徒らに餘事を語るものなりとの譏を招くに止る可しと雖も、今結末を整ふるの意味を以て一言を之に附加せんならば、吾人は先づ四分法を以上の如く解し、之に則りて經濟理論の攻究に從事するは、今の日本に於て果して無用なるべきや否やと自ら問ひ、然る後に自ら又た其決して然らざるを言はんと欲す。蓋し經濟理論の邦人の間に了解せられざるや誠に甚しきものありと謂ふ可き其中に就ても、彼の分配論と消費論とは、其意義重要殆んど全く解せられずして、一部の人士の如きは、人の偶ま分配の公平を論じ勞働者階級の向上を論策する者あるを見れば、強ちに之を過するに危險思想を談ずるの徒を以てし、奢侈の弊を論じ其因て來る所を究めて、其主要なる原因が、所詮は、富者の富むこと益甚しく、貧者の貧しきこと又た益甚しきものある這個の事情に在るを喝破し、斯くて再び彼に課する所を重くし、此に課する所を輕からしめんと計策する者あるを聞けば、則ち又た其心甚だ安からざるものゝ如くにして、或は之を目して、國を賊し社會を毀つの企なるかの如く解するの狀なきにあらず。是れ誠に、彼等の爲には嘲笑を以て之に酬れば則ち足れりとして止み得んも、然かも邦家の爲めには、唯單に、嘆ず可く憂ふ可きの事象たらずとせずと、爲すのみを以て止み得ざるものなり。

然れども其如斯風潮を生みたる主たる原因は、彼等が學者の分配を論じ消費を說くは、單に分配論の爲めに分配論を談じ、消費論の爲めに消費論を語るものにあ

らずして、國家富強の原因が、富の分配と消費とに關はること、甚だ大なるものあるを認むるが爲めに外ならざるを、明にせざる其不智に之を求む可きなれば、先づ彼の點を強調して、彼等の誤解を正し、世人の惑を解かんは、邦家の爲めにも將た又た斯學向後の進運の爲めにも、共に必要缺く可からずと謂ふ可し。然かも彼の點を強調して此目的に資益せんには、則ち又た先づ四分法論者の所論に則りて統一的に是等の諸點を闡明するを以て最緊要事たりとすべし。即ち吾人に彼の言ある所以なるが、人若し重きを此點に置き吾人敘上の議論を見るあらんか、吾人の所謂四分法の辨は、纔て又た社會政策の辨、勞働問題の辨たらんなり。即ち四分法の辨に合せて又た之を辨じ置く所以なりとす矣。

雜錄

德川時代の尙農論に對する支那思想の影響

野尻清隆

史を閱するに日本書記崇神天皇の條に『農は天下の大本なり民の恃んで以て生くる所なり、今河内狹内狹山埴田水少し、是を以て其國百姓農事を怠る、其れ多く池溝を開きて以て民業を寬めよ』（日本書記）とあり、我國古來瑞穗の國と稱し、半穴居時代に於て漁撈狩獵と同時に幼稚なる耕作法に依る農業を營みし時代に米穀の產出ありて之を常食とせし說を是認する時は（福田博士日本經濟史論參照）當時既に農業を以て國家存立の基礎とするの思想ありしや言を俟たざる所なり、爾來歷代の聖帝農事の發達を以て一國の最大要務とし、或は池溝を開きて灌漑に便ならしめ或は拓殖移住の策を立てゝ其の發達を促進せしめたる等、農政に力を須ひたる事決して少しとせず、爾來古代より中世、中世より近世に至る迄、農は事實上國家の根本にして王政の要、生民の基、農を中心としての政策上に築かれたる政治經濟に外ならざりき。

茲に於てか我國舊時代の學者にして苟も口に經濟を云爲する者一人として農本主義論者ならざるはなし、太宰春臺の如きも其數に洩れずして其著書の到る所に於て之れが消息を洩せり、即ち曰く、

『民の業に本末と云ふ事あり、農を以て本業と云ひ、工商賈を以て末業と云ふ、（中略）農民少ければ國の衣食乏しくなる故に先王の治めには殊に農を重んぜらる（經濟錄食貨篇）

又曰く、『夫れ國富と粟とは農より生ず故に先